

時代の風

未曾有の災害に、重大な原発事故が重なった東日本大震災。本紙「時代の風」執筆者にそれぞれの思いを記してもらった。

「天災は忘れた頃にやって来る。だけではない。前回の災害を噛みしめて教訓を学び備えれば、次なる天災はそれを嘲笑うようになく想定外の角度から奇襲攻撃を仕かけてくる。都市型の神戸の後は、新潟や宮城・岩手の山間部であった。次は首都直下かはたまた大阪や京都か否、それ以上に日本列島の南方に沈み込むブレートが起こす大地震津波であろう。それは必ず来る」

私がこう書いたのは2カ月前、河田恵昭著「津波災害」への本紙書評においてだった。事実は南海・東南海地震の津波ではなく、東北沖のブレートが起こすさまじい大津波であった。またも天災は奇襲攻撃を決めたのである。



まこと
おおきい
五百旗頭
眞

東日本大震災

防衛大学校校長

「被災ゼロ」という報道には2種類の意味がある。文字通りそうである場合と、逆に壊滅的な被害を受けたため、外部社会へ被災を伝えることができない場合だ。16年前の阪神大震災の朝、現地のわが家によつやく電気が通じテレビをつけると「死者38人」のテロップが流れていった。衝撃を受けながらも、その程度なのかと思った。兵庫の地

そんな中、広域対処の軸として浮かび上がったのが自衛隊である。政府は自衛隊に10万人規模での出動を命ぜるとともに、仙台の君塚栄治東北方面総監を

「複合事態」のどん底で英慮を

での60000人を超える犠牲を日本社会が認識するには長い時間を要した。

この度は、ガレキに埋もれた一人ひとりではなく、津波に流されて消失した町の住民が集団的に行方不明となつた。最も悲惨な「被災ゼロ」地域が、岩手、宮城、福島の3県を中心にならぎに広がつたのである。

そのことは救援と復興を困難にする。阪神大震災の際には、中央即応集団を創設し、各連隊

陸海空にまたがる災害対処の統合任務部隊指揮官に任命した。交通体系が不全の中、全自衛隊のもつ機動力を総合運用して救援活動の迅速化・集約化を図ったのである。

思えば、阪神大震災の時、自衛隊は初動が遅いと難ぜられながら、やがて大きな組織力によってガレキを除去しライフラインを支えた。その後、自衛隊は中央即応集団を創設し、各連隊

に24時間待機の小隊を設け、事態への即応体制を築いた。陸海空の統合運用体制をも構築した。これらがこの度の災害対処に大きな力發揮している。昨年の防衛大綱は、陸上自衛隊の兵数を微減にとどめ15万4000人とした。この度10万人の出動をもつてしても不足する事態を見れば、減らし過ぎなくてよかつたとつくづく思う。世

界が称賛する模範的な日本の被災者たちに、なお救援の手が足りない中、神戸の際に登場した130万人のボランティアの再現が期待される。そして神戸の国際と異なり、世界各国からの支援を深く受け入れたことが高く評価されよう。

「複合事態」である。福島原子力発電所の被災が地球的な関心を集め、大災害となつた。2万人を超えるかもしれない大津

波の犠牲者に対し、原発事故が深刻化したとしても犠牲者は限られたものであろう。だが数は代えられない放射能への恐怖がある。それが人々の心を金縛りにしている。東京から脱出する人、外国へ逃れようとする人がいる。休業する会社もある。こんな重大危機においてこそ、社会の各所が自らの持ち場でがんばり、経済崩壊を防がねばならない。自由と能力のある人々には東北地方への支援活動が期待される。日本人はそれができる国民である。だのに核の脅威が人々に逃走の集団心理を呼び起さなければならないのである。東京電力の不眠の苦悶には敬意を表する。計画停電にも協力したい。ただ、交通機関は除外すべきである。交通は社会の血脉である。あの敗戦の中でさく、国鉄はずなりの人々を運んで社会を支えた。この災害で日本の経済社会を死なせず、再生の機会とする英慮がまたられる。